



イザヤ ミケランジェロ

イザヤは旧約聖書最大の預言者と呼ばれています。イザヤ書は66章からなる大部の書で、私には細部はもちろん、全貌を把握するのは困難です。新約聖書のマタイ福音書には何度もイザヤの言葉が引用されていて、イエス様の時代にもイザヤの影響が大きかったことを知らされます。そればかりか、イザヤの言葉が私たちの身近にいつもあると感じずにはられません。イザヤの言葉は美しく、力強く、私たちの心に沁み通っています。

旧約学者木田献一先生の解説によれば、イザヤ書は大きく三つの部分に分かれ、第一部は1～39章(第一イザヤ:紀元前8世紀の後半エルサレムで活動した預言者イザヤによる)、第二部は40～55章(第二イザヤ:539BC、ペルシャにより帰還が許された時期の無名の預言者による)、第三部は56～66章(第三イザヤ:帰還後の前6世紀に第二イザヤの弟子による)とされています。

第39章まで、イザヤの預言の言葉と共に、イザヤの活動を具体的に記していますので、預言者イザヤの信仰、人柄、果たした使命をよく理解できます。彼は祭司であり、信仰に生きた人です。その上、**ウジヤの他の事績は、初期のことも後期のことも、預言者、アモツの子イザヤが書き残している(歴代下 26:22)**とあるように、王宮の書記官としても働く、才能豊かな知識人、信頼される人物であることが分かります。ウジヤ王は農耕、牧畜にも熱心でしたから、イザヤも感化を受け、自然の恵みを感謝し、自然を愛する人であったと想像します。家族もいます。女預言者である妻、息子がシェアル・ヤシュブとマヘル・シャルル・ハシユ・バズであると名前も記されています。充実した仕事をし、立派な夫であり、父でありましたが、世界は暴虐の嵐が吹いています。食物がなく、苦しむ、貧しい人々の姿がイザヤの目には焼き付いています。イザヤは若い頃は祭司として、神殿で祈りを捧げていたのですが、預言者として召命を受けた後は、神殿を離れて、預言者として語るべき言葉を与えられるよう、政権から距離を置いて、自由な立場に立っていたと思います。周辺諸国の状況を冷静に見きわめるために、各地を巡っていたのかもしれませんが。信仰のゆえに、想像を絶する苦難の道である預言者として生涯を終えたと思われる。

イザヤは「**天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる**」と預言を始めています。スケールが大きいとまず思われます。主題は「**審判、警告、荒廃、陥落、滅亡、破滅**」などが繰り返されますが、それらの指摘の倍以上に、「**イスラエルの回復、終末の平和、神の霊の働き、驚くべき御業**」など、必ず神の憐れみがあることを、語っているのです。イザヤの神への信頼は揺るがないものです。**そして、娘シオンが残った／包囲された町として。ぶどう畑の仮小屋のように／きゅうり畑の見張り小屋のように。(1:8)**と、「**残りの者がある**」という希望を告げています。

イザヤは **わたしは逆らう者を必ず罰し／敵対する者に報復する。(1:24)**との神の徹底的な裁きと同時に、**シオンは裁きをとおして贖われ／悔い改める者は恵みの御業によって贖われる。(1:27)**と、裁かれ、悔い改めることによって、恵みを得ると言います。イザヤは、人の罪に対する神の裁きは当然のものである、人は罪深いと、徹底的に自らを低くする姿勢をもった預言者です。苦難、貧しさ、辱め、それを他人事ではなく、自らの身に負って生きたのです。それだけに恵みの日の輝かしさは **主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。(2:4)**と平和に満ちています。